

谷崎潤一郎全集

第十卷



谷崎潤一郎全集 第十卷

定價一三〇〇圓

昭和四十二年八月二十五日初版發行
昭和四十八年七月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

痴人の愛	一
マンドリンを弾く男	三〇三
蘿洞先生	三七
二月堂の夕	三三
赤い屋根	三四一
馬の糞	三八九
爲介の話	三九九
友田と松永の話	四〇九
一と房の髪	四九五
金を借りに來た男	五二九

上海見聞錄

上海交遊記

青塚氏の話

五二

五二

五九

痴人の愛

大正十三年三月—六月「大阪朝日新聞」

大正十三年十一月號—十四年七月號「女性」

私は此れから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのまゝの事實を書いて見ようと思ひます。それは私自身に取つて忘れがたない貴い記録であると同時に、恐らくは讀者諸君に取つても、きつと何かの參考資料となるに違ひない。殊に此の頃のやうに日本もだん／＼國際的に顔が廣くなつて來て、内地人と外國人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入つて來る、男は勿論女もどし／＼ハイカラになる、と云ふやうな時勢になつて來ると、今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦關係も、追ひ／＼諸方に生じるだらうと思はれま
すから。

考へて見ると、私たち夫婦は既にその成り立ちから變つてゐました。私が始めて現在の私の妻に會つたのは、ちやうど足かけ八年前のことになります。尤も何月の何日だつたか、委くはしいことは覚えてゐませんが、兎に角その時分、彼女は淺草の雷門の近くにあるカフエエ・ダイヤモンドと云ふ店の、給仕女をしてゐたのです。彼女の歳はやつと數へ歳の十五でした。だから私が知つた時はまだそのカフエエへ奉公に來たばかりの、ほんの新米だつたので、一人前の女給ではなく、そのの見習ひ、——まあ云つて見れば、ウエイトレスの卵に過ぎなかつたのです。

そんな子供をもうその時は二十八にもなつてゐた私が何で眼をつけたかと云ふと、それは自分でもハツキリとは分りませんが、多分最初は、その兒の名前が氣に入つたからなのでせう。彼女はみんなから「直ちやん」と呼ばれてゐましたけれど、或るとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美と云ふのでした。此の「奈緒美」といふ名前が、大變私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くときまるで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議なもので名前がハイカラだとなると、顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大そう惻巧さうに見え、「こんな所の女給にして置くのは惜しいものだ」と考へるやうになつたのです。

實際ナオミの顔だちは、(斷つて置きますが、私はこれから彼女の名前を片假名で書くことにします。どうもさうしないと感じが出ないのです)活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあつて、確かに西洋人じみてゐました。此れは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつてゐる現在でも多くの人々がさう云ふのですから、事實に違ひないのです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素つ裸にして見ると、その體つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になつてから分つたことで、その時分には私もそこまでは知りませんでした。たゞおぼろげに、きつとあゝ云ふスタイルなら手足の恰好も悪くはなからうと、着物の着こなし工合から想像してゐただけでした。

一體十五六の少女の氣持と云ふものは、肉親の親か姉妹でゝもなければ、なか／＼分りにくいものです。だからカフェエにゐた頃のナオミの性質がどんなだつたかと云はれると、どうも私には明瞭な答へが出来ません。恐らくナオミ自身にしたつて、あの頃はたゞ何事も夢中で過したと云ふだけでせう。が、ハタか

ら見た感じを云へば、執方^{どつち}かと云ふと、陰鬱な、無口な兒のやうに思へました。顔色なども少し青みを帯びてゐて、譬へば斯う、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたやうな、深く沈んだ色合をしてゐて、健康さうではありませんでした。此れは一つにはまだ奉公に來たてでたつたので、外の女給のやうにお白粉もつけず、お客や朋輩にも馴染がうすく、隅の方に小さくなつて黙つてチヨコチヨコ働いてゐたものだから、そんな風に見えたのでせう。そして彼女が惻巧さうに感ぜられたのも、やつぱりそのせゐだつたかも知れません。

こゝで私は、私自身の經歷を説明して置く必要がありますが、私は當時月給百五十圓を貰つてゐる、或る電氣會社の技師でした。私の生れは栃木縣の宇都宮在で、國の中學校を卒業すると東京へ來て藏前^{くらまへ}の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になつたのです。そして日曜を除く外は、毎日芝口の下宿屋から大井町の會社へ通つてゐました。

一人で下宿住居をしてゐて、百五十圓の月給を貰つてゐたのですから、私の生活は可成り樂でした。それに私は、總領息子ではありませんけれども、郷里の方の親やきやうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。と云ふのは、實家は相當に大きく農業を營んでゐて、もう父親は居ませんでした、年老いた母親と、忠實な叔父夫婦とが、萬事を切り盛りしてゐてくれたので、私は全く自由な境涯にあつたのです。

が、さればと云つて道樂をするのもありませんでした。先づ模範的なサラリー・マン、——質素で、眞面目で、あんまり曲がなさ過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日々の仕事を勤めてゐる、——當時の私は大方そんな風だつたでせう。「河合讓治君」と云へば、會社の中でも「君子^{くんし}」といふ評判があ

つたくらゐですから。

それで私の娯樂と云つたら、夕方から活動寫眞を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たま／＼奮發して帝劇へ出かけるとか、せい／＼そんなものだつたのです。尤も私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接觸することは無論嫌ひではありませんでした。元來が田舎育ちの無骨者ぶこものなので、人づきあひが拙く、従つて異性との交際などは一つもなく、まあ其のために「君子」にさせられた形だつたでもありませんが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなか／＼油斷なく、往來を歩く時でも毎朝電車に乗る時でも、女に對しては絶えず注意を配つてゐました。恰もさう云ふ時期に於いて、たま／＼ナオミと云ふ者が私の目の前に現れて來たのです。

けれど私は、その當時、ナオミ以上の美人はないときめてゐた譯では決してありません。電車の中や、帝劇の廊下や、銀座通りや、さう云ふ場所で擦れ違ふ令嬢のうちには、云ふ迄もなくナオミ以上に美しい人が澤山あつた。ナオミの器量がよくなるかどうかは將來の問題で、十五やそこの小娘では此れから先が楽しみでもあり、心配でもあつた。ですから最初の私の計畫は、兎に角此の兒を引き取つて世話をしてやらう。そして望みがありさうなら、大いに教育してやつて、自分の妻に貰ひ受けても差支へない。

と、云ふくらゐな程度だつたのです。此れは一面から云ふと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに單調なその日暮らしに、多少の變化を與へて見たかつたからでもあるのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きてゐたので、何とかして、此の殺風景な生活に一點の色彩を添へ、溫かみを加へて見たいと思つてゐました。それにはたとひ小さくとも一軒の家を構へ、

部屋を飾るとか、花を植ゑるとか、日あたりのいいゼランダに小鳥の籠を吊るすとかして、臺所の用事や、拭き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだらう。そしてナオミが来てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなつてくれよう。と、大體そんな考でした。

そのくらゐなら、なぜ相當な所から嫁を迎へて、正式な家庭を作らうとしなかつたのか？——と云ふと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇氣がなかつたのでした。此れに就いては少し委しく話さなければなりません、一體私は常識的な人間で、突飛なことは嫌ひな方だし、出来もしなかつたのですけれど、しかし不思議に、結婚に對しては可なり進んだ、ハイカラな意見を持つてゐました。「結婚」と云ふと世間の人は大そう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。先づ第一に橋渡しと云ふものがあつて、それとなく雙方の考をあたつて見る。次には「見合ひ」といふ事をする。さてその上で雙方に不服がなければ改めて媒人を立て、結納を取り交し、五荷とか、七荷とか、十三荷とか、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから興入れ、新婚旅行、里歸り、……と随分面倒な手續きを蹈みますが、さう云ふことがどうも私は嫌ひでした。結婚するならもつと簡單な、自由な形式でしたいものだと思つてゐました。

あの時分、若しも私が結婚したいなら候補者は大勢あつたでせう。田舎者ではありませんけれども、體格は頑丈だし、品行は方正だし、さう云つては可笑しいが男前も普通であるし、會社の信用もあつたのですから、誰でも喜んで世話をしてくれたでせう。が、實のところ、この「世話をされる」と云ふ事がイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとひ如何なる美人があつても、一度や二度の見合ひでもつて、お互の意氣や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云ふくらゐな、ほ

んの一時の心持で一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものぢやない。それから思へばナオミのやうな少女を家に引き取つて、徐にその成長を見届けてから、氣に入つたらば妻に貰ふと云ふ方法が一番いゝ。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい譯ではないのですから、それで澤山なのでした。

のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の發育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、云はゞ遊びのやうな氣分で、一軒の家に住むと云ふことは、正式の家庭を作るのとは違つた、又格別な興味があるやうに思へました。つまり私とナオミでたわいのないまま、ごとをする。「世帶を持つ」と云ふやうなシチ面倒臭い意味でなしに、呑氣なシンプル・ライフを送る。——此れが私の望みでした。實際今の日本の「家庭」は、やれ箆箆だとか、長火鉢だとか、座布團だとか云ふ物が、あるべき所に必ずなければいけなかつたり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れてゐたり、近所隣りや親類同士の付き合ひがうるさかつたりするので、その爲めに餘計な入費も懸るし、簡単に濟ませることが煩雜になり、窮屈になるし、年の若いサラリー・マンには決して愉快なことでもなく、いゝことでもありません。その點に於いて私の計畫は、たしかに一種の思ひつきだと信じました。

私がナオミに此のことを話したのは、始めて彼女を知つてから二た月ぐらゐ立つた時分だつたでせう。その間、私は始終、暇さへあればカフェエ・ダイヤモンドへ行つて、出来るだけ彼女に親しむ機會を作つたものでした。ナオミは大變活動寫眞が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗きに行つたり、その歸りにはちよつとした洋食屋だの、蕎麥屋だのへ寄つたりしました。無口な彼女はそんな場合にもい

たつて言葉数が少い方で、嬉しいのだから詰まらないのだから、いつも大概はむづつりとしてゐます。そのくせ私が誘ふときは、決して「いや」とは云ひませんでした。「ええ、行つてもいいわ」と、素直に答へて、何處へでも附いて行くのでした。

一體私をどう云ふ人間と思つてゐるのか、どう云ふつもりで附いて来るのか、それは分りませんでした。が、まだほんたうの子供なので、彼女は「男」と云ふ者に疑ひの眼を向けようとしなない。此の「伯父さん」は好きな活動へ連れて行つて、とき／＼御馳走をしてくれるから、一緒に遊びに行くのだと云ふだけの、極く單純な、無邪氣な心持でゐるのだらうと、私は想像してゐました。私にしたつて、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のことは、當時の彼女に望みもしなければ、素振りにも見せはしなかつたのです。あの時分の、淡い、夢のやうな月日のことを考へ出すと、お伽噺の世界にでも住んでゐたやうで、もう一度あゝ云ふ罪のない二人になつて見たいと、今でも私はさう思はずにはゐられません。

「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね？」

と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、うしろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云つたものです。するとナオミは、

「いゝえ、ちつとも見えないわ」

と云ひながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗かうとする。

「そんなにしたつて見えやしないよ、此の木の上へ乗つかつて、私の肩に掴まつて御覽」

さう云つて私は、彼女を下から押し上げてやつて、高い手すりの横木の上へ腰をかけさせる。彼女は兩足をぶらん／＼させながら、片手を私の肩にあてがつて、やつと満足したやうに、息を凝らして繪の方を視つめる。

「面白いかい？」

と云へば、

「面白いわ」

と云ふだけで、手を叩いて愉快がつたり、跳び上つて喜んだりするやうなことはないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましてゐるやうに、黙つて、伶俐さうな眼をパツチリ開いて見物してゐる顔つきは、餘程寫眞が好きなのだと領されました。

「ナオミちゃん、お前お腹が減つてやしないか？」

さう云つても、

「いゝえ、なんにも喰べたくない」

と云ふこともありませんが、減つてゐる時は遠慮なく「えゝ」と云ふのが常でした。そして洋食なら洋食、お蕎麥ならお蕎麥と、尋ねられればハツキリと喰べたい物を答へました。

二

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピクフォードに似てゐるね」

と、いつのことでしたか、ちやうどその女優の映畫を見てから、歸りにとある洋食屋へ寄つた晩に、それが話題に上つたことがありました。

「さう」

と云つて、彼女は別にうれしさうな表情もしないで、突然そんなことを云ひ出した私の顔を不思議さうに見ただけでしたが、

「お前はさうは思はないかね」

と、重ねて聞くと、

「似てゐるかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを混血兒あひのこみたいだつてさう云ふわよ」と、彼女は濟まして答へるのです。

「そりやさうだらう、第一お前の名前からして變つてゐるもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね」

「誰がつけたか知らないわ」

「お父つあなかねお祖母さんかね、——」

「誰だか、——」

「ぢやあ、ナオミちゃんのお父つあんは何の商賣をしてるんだい」

「お父つあんはもう居ないの」

「お祖母さんは？」

「お祖母さんは居るけれど、——」

「ぢや、兄弟は？」

「兄弟は大勢あるわ、兄さんの、姉さんの、妹だの、——」

それから後もこんな話はたび／＼出たことがありますけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしまふのでした。で、一緒に遊びに行くときは大概前の日に約束をして、きめた時間に公園のベンチとか、観音様のお堂の前とかで待ち合はせることにしたのですが、彼女は決して時間を違へたり、約束をすつぽかしたりしたことはありませんでした。何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう歸つてしまつたかな」と、案じながら行つて見ると、矢張キチンと其處に待つてゐます。そして私の姿に氣が付くと、ふいと立ち上つてつかつか、此方へ歩いて來るのです。

「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待つただらう」

私がさう云ふと、

「えゝ、待つたわ」

と云ふだけで、別に不平さうな様子もなく、怒つてゐるらしくもないのでした。或る時などはベンチに待つてゐる約束だつたのが、急に雨が降り出したので、どうしてゐるかと思ひながら出かけて行くと、あの池の側にある何様だかの小さい祠ほこらの軒下にしゃがんで、それでもちゃんと待つてゐたのには、ひどくいぢらしい氣がしたことがあります。